

きゅうり

炭疽病、褐斑病

発生の動向

1 炭疽病

- (1) 令和6年の発生圃場率は80.4%（平年68.6%）で、平年よりやや高かった（図1）。
- (2) 令和6年の秋期に広く発生がみられたことから、伝染源量は多いと考えられる（図2）。
- (3) 例年、7月上中旬から発生が増加し、降雨が続くと急激にまん延する（図2）。
- (4) 令和2年以降、多発傾向が続いている（図1）。

2 褐斑病

- (1) 令和6年の発生圃場率は17.6%（平年47.9%）で平年よりやや低かった（図3）。
- (2) 令和6年は8月下旬まで発生圃場率が低かったが、9月上旬に発生圃場率が高まった（図4）。
- (3) 例年、7月下旬から発生が増加し、降雨が多いと発生量が増加する（図4）。

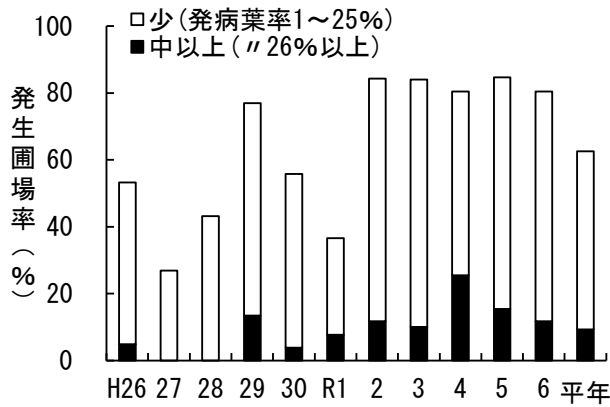


図1 炭疽病の発生圃場率の年次推移（年間評価）

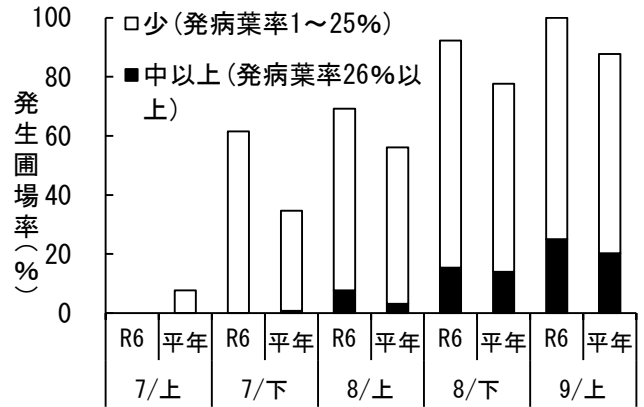


図2 炭疽病の時期別発生圃場率

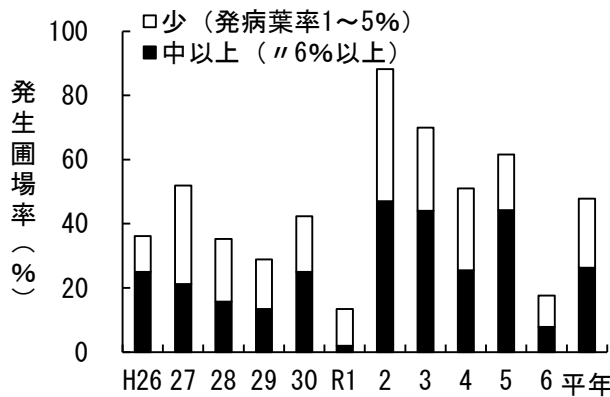


図3 褐斑病の発生圃場率の年次推移（年間評価）

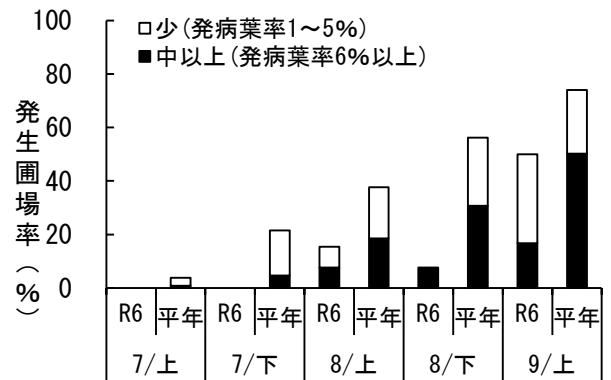


図4 褐斑病の時期別発生圃場率

防除対策

1 炭疽病、褐斑病共通

- (1) 罹病したつる等が伝染源となるため、前年のキュウリネットは使用しない。前年の発病圃場で使用した支柱等の資材は、使用前に、付着している残さを除去し、消毒する。
- (2) 被害残さは定植までに圃場から除去し、圃場衛生に努める。
- (3) 発病後は降雨のつど急速にまん延が進むため、予防を基本とし、本病に対して効果が高い薬剤を用いた定期的な防除を行う。
- (4) 感染拡大を抑制するため、初期の発病葉（図5、6）は、誤診をおそれず、早期に、積極的に摘葉する。特に炭疽病では、発病葉を残すと、病斑部から多量の胞子が落下し、発病葉直下では生長点や新展開葉で発病して早期枯れ上がりの原因となる。
- (5) 発病葉の摘葉後、ただちに効果の優れる薬剤を十分量、アーチ両側から丁寧に散布する。
- (6) 8月下旬以降は新葉の展開が少なくなり、発病は枯れ上がりに繋がるため、有効な薬剤により定期的な防除を行う。
- (7) 耐性菌の出現が懸念されるので、QoI剤やSDHI剤は連用しない。
- (8) 窒素過多、肥料切れは発生を助長するので、適正施肥に努める。また、過繁茂、なり疲れも発生を助長するので、摘葉や整枝、収穫等の作業が遅れないように努め、草勢を維持する。

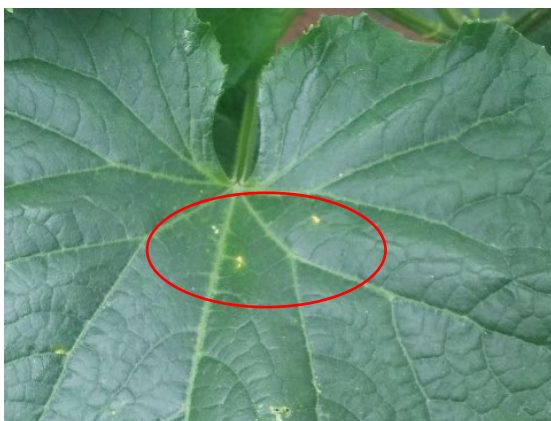


図5 褐斑病の初期病斑



図6 炭疽病の初期病斑

※ 両病害の初期病斑は類似しているため、発病を確認したら病害の種類に関わらず、初期の発病葉を摘んだ後、直ちに薬剤散布を実施する。

コナジラミ類

発生 の 動 向

- 1 令和6年の発生圃場率は29.9%（例年13.2%）で例年より高く、8月下旬以降には発生程度の高い圃場も確認された（図1、2）。
- 2 令和6年は、一部地域でこれまで県内で広く発生しているオンシツコナジラミに代わって、タバココナジラミが優占種として確認された。

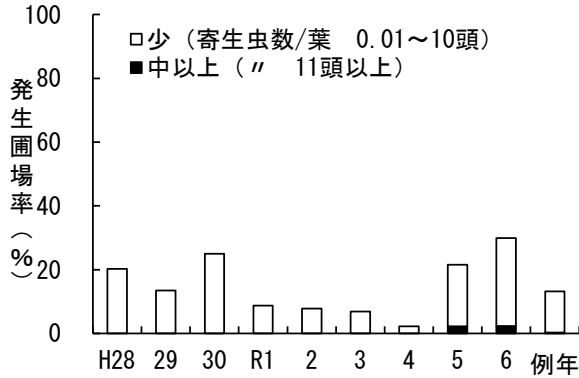


図1 コナジラミ類の発生圃場率の年次推移
（年間評価）※例年：H28～R5の平均値

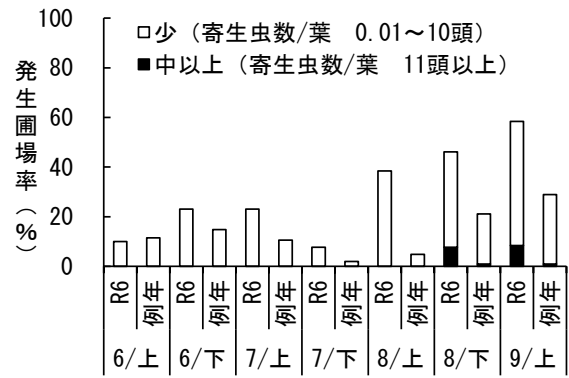


図2 コナジラミ類の時期別発生圃場率
※例年：H28～R5の平均値

防 除 対 策

- 1 施設及び圃場周辺の雑草は発生源となるため除去する。
- 2 圃場での発生種を把握する。コナジラミ類にはオンシツコナジラミとタバココナジラミがあり、形態で区別が可能である。

成虫：タバココナジラミの成虫は体長が0.8mmで体色は淡黄色である。オンシツコナジラミに比較してやや小さく、体色が濃い（図3）。

幼虫：1齢から4齢まであり、4齢で見ると判別が容易である。タバココナジラミの4齢幼虫は、長さ0.7～1.0mm、幅0.5～0.8mm、後部がやや細い楕円形で、中齢以降は扁平な体の背面がわずかに盛り上がる。オンシツコナジラミの4齢幼虫は体色が白く、楕円形で厚みのあるコロッケ状で、毛状の突起が多い（図4）。



図3 成虫の比較

（左：タバココナジラミ、右：オンシツコナジラミ）

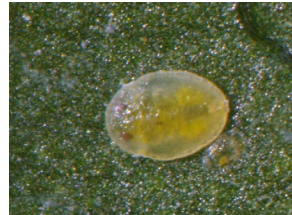


図4 4齢幼虫の比較

（左：タバココナジラミ、右：オンシツコナジラミ）

- 3 発生種に応じて防除薬剤を選択する。一部のネオニコチノイド系、ピレスロイド系等の薬剤はタバココナジラミバイオタイプQへの効果が低下している。ただし、タバココナジラミは個体群によっても薬剤感受性が異なるため、薬剤散布後は効果の確認を行うこと。
- 4 タバココナジラミは、きゅうりやメロンの退緑黄化病ウイルス (Cucurbit chlorotic yellows virus (CCYV)、本県未発生) を媒介する。退緑黄化病はこれまできゅうり又はメロンで30府県から特殊報が発表されており、令和6年には東北で初めて福島県のきゅうりで発生が確認された。また、トマトでは黄化葉巻病ウイルス (Tomato yellow leaf curl virus (TYLCV)) を媒介することで知られ、本県では平成30年に初めて発生が確認されて以降、一部地域で発生が確認されていることから、これら病害の侵入・発生拡大を防ぐためにもタバココナジラミの防除は重要である。